

学位論文題名

シベリア地域諸民族の伝統的通過儀礼とその変化

学位論文内容の要旨

本論文はシベリア地域諸民族の伝統的通過儀礼とその変化から通過儀礼の役割を考察したものである。具体的には西シベリア地域、極東アムール地域、シベリア北東部の三地域を取り上げ、各地域諸民族の伝統的通過儀礼の内容を整理、分析した。そのために主にロシア語による19世紀末-20世紀初め頃、ソ連時代およびそれ以降の各民族に関する民族誌、儀礼に関する論文等を資料として使用した。さらに西シベリア地域諸民族のハンティおよびマンシの人々を対象に通過儀礼の実践に関する観察および聞き取り調査を行ない、通過儀礼実践の現状を明らかにし、伝統的通過儀礼の内容との比較から、ハンティとマンシにおける通過儀礼の変化の実態と役割を明らかにした。

第1章では通過儀礼を定義し、これまでのシベリア地域諸民族の研究の流れについて述べた。本論文では人生のさまざまな節目を通過する際に行なわれる儀礼を通過儀礼とし、それぞれの節目の通過に関わる考え方を含めたものとした。具体的には誕生、結婚、出産、死に関する儀礼を取り上げる。誕生儀礼には誕生時に行なわれる名付けや子供の養育に関わるものなどが含まれる。結婚儀礼には婚姻規則や婚姻形態、求婚や結婚の準備および結婚式に関するものが含まれる。出産儀礼には妊娠期のタブー、出産、産後の処置や浄化儀礼に関わるものが含まれる。死者儀礼には死生観や葬式の準備、葬式および供養儀礼に関わるものが含まれる。

第2章では西シベリア地域、ハンティ、マンシ、ネネツ、セリクープ、ガナサン、ケットの伝統的な通過儀礼について文献資料から整理した。またハンティおよびマンシの通過儀礼実践の現状を観察および聞き取り調査の内容から整理した。誕生儀礼では「新生児に亡くなった親戚の魂が復活する」という考えが共通して見られ、その魂を判定する儀礼が行なわれた。またハンティおよびマンシでは生母以外に社会的な母親を持つ習慣が見られた。結婚儀礼については求婚儀礼の内容(仲人による求婚、儀礼的な拒否、婚資額の交渉)が共通しており、結婚式はハンティ、ネネツ、セリクープ、ガナサンでその内容(花嫁の実家での宴会、移動、花婿の実家での宴会)が共通しているが、ケットだけが異なっている(シャマンによる儀礼の後、新郎新婦が別々に宴会をする)。出産儀礼では出産を不浄と考えて産屋に移って出産し、浄化儀礼を経て日常生活に戻ることが共通して見られた。死者儀礼では「死者はあの世ですでに亡くなった親戚と共にこの世と同様の生活を続ける」という死生観を共有し、自宅での葬式の準備、埋葬による葬式、供養儀礼という死者儀礼の流れおよび内容に共通性が見られた。ハンティおよびネネツの結婚儀礼とネネツの死者

儀礼については 19 世紀と 20 世紀の内容を比較し、これらの儀礼の内容が概ね維持されたことが分かった。ハンティおよびマンシの通過儀礼実践についての調査からは、社会変化に伴い儀礼実践の内容や方法を変化させながらも誕生儀礼や死者儀礼は現在でも実践されているが、結婚儀礼はほとんど実践されていないことを示した。

第 3 章では極東アムール地域、ナナイ、ウリチ、オロチ、ウデへ、ニブフの伝統的通過儀礼について文献資料から整理した。誕生儀礼では地域的な共通性は見られなかった。結婚儀礼では交叉イトコ婚、幼少のうちに両親が結婚を決めること、逆縁婚の習慣などの婚姻規則や婚姻形態に多くの共通点が見られた。ナナイ、ウリチ、オロチ、ニブフでは花嫁側と花婿側で二度結婚の宴会を行なうことが共通して見られ、一方ウデへは花婿の家だけで宴会をした。出産儀礼では妊娠期に出産を不浄と考えて危険を避けるためと、出産を楽にするためのタブーが見られた。産屋で出産し、浄化儀礼を経るまで不浄と見なされることはこの地域も共通しているが、母親は比較的すぐに母屋へ戻り、そこでの生活場所や仕事を制限され、浄化儀礼はしばらくしてから行なわれた。死者儀礼では「死者はあの世ですでに亡くなった親戚と共にこの世と同様の生活を続ける」という死生観を共有し、ナナイ、ウリチ、オロチでは地上葬（ソ連時代以後は埋葬）、ニブフでは火葬と葬法は異なるが、自宅での葬式の準備、墓地での葬式、月一度の供養儀礼、数年後の大供養儀礼での死者儀礼の完了という流れが共通していた。また溺死者、クマに殺された猟師、双子の死者儀礼は、この地域の主要な生業活動であった漁撈や狩猟の成功祈願と結びついていた。

第 4 章ではシベリア北東部、コリヤークとチュクチの伝統的通過儀礼およびコリヤークの結婚および死者儀礼の変化について整理した。誕生儀礼では「死者の魂が新生児に復活する」という考えとその魂の判定方法、復活した人物の名前を子供に付けることが共通していた。結婚儀礼では花婿が花嫁の父親のもとで働き、気に入られると結婚が認められるという花婿の労働が共通していた。また逆縁婚や集団婚などで一度得られた財産や家族関係を維持することが見られた。この地域では結婚式の内容は共通していない。出産儀礼では出産を不浄と考えて出産後浄化儀礼を経てから日常生活に戻ることは共通して見られた。死者儀礼では「死者は死者の国で以前亡くなった親戚と共にこの世と同様の生活を続ける」という死生観を共有し、葬法は火葬あるいは風葬と地域によって民族内でも異なっているが、自宅での葬式の準備、葬式、供養儀礼の内容や流れは共通していた。トナカイ飼育者では毎年トナカイを供養し、その枝角を墓に積み上げていく供養儀礼が続けられた。コリヤークの結婚および死者儀礼は生業活動と共に 19 世紀末から 20 世紀末まで概ね維持されたことが分かった。

第 5 章ではシベリア地域諸民族の伝統的通過儀礼の比較とハンティおよびマンシの通過儀礼実践の現状を整理し、通過儀礼の役割について考察した。西シベリア地域における社会的な親子関係の形成を伴う誕生儀礼、極東アムール地域における特別な死者に対する狩猟、漁撈の成功祈願と結びついた死者儀礼、シベリア北東部における花嫁の家族による花婿のテストを伴う結婚儀礼など地域独自の儀礼がある一方、死生観や各儀礼の全体的な流れなどはシベリア地域全体で共通しており、広く生死に関わる世界観を共有しながら、それぞれの地域の環境や生業活動と結びついた通過儀礼を発展させてきたことが分かった。

ハンティおよびマンシの通過儀礼実践の現状からは、彼らが現在でも世界観を維持し、社会の変化に合わせて伝統的通過儀礼を一部変化させて実践していることが分かった。伝統的通過儀礼を実践するためには伝統文化に詳しい年長者や異民族である家族の理解と協力が不可欠である。現在の通過儀礼の実践は個人が無事に節目を通過することや儀礼を共に行なう人々の連帯感を強めることに加え、伝統文化の保持や異文化への理解、敬意につながっている。ともすれば民族的アイデンティティの表現として衝突の原因ともなり得るそれぞれの民族の儀礼が、通過儀礼においてはその目的のために伝統文化の消滅や民族間、世代間の衝突につながることなく、集団を維持する役割を果たしていることを指摘した。

学位論文審査の要旨

主 査 教 授 煎 本 孝
副 査 教 授 津 曲 敏 郎
副 査 教 授 官 武 公 夫

学 位 論 文 題 名

シベリア地域諸民族の伝統的通過儀礼とその変化

本論文はシベリア地域諸民族の伝統的通過儀礼とその変化を、西シベリア地域、極東アムール地域、シベリア北東部という各地域について、19世紀末から20世紀初め頃、さらにソ連時代およびそれ以降の各民族に関する主にロシア語による民族誌、儀礼に関する論文等に基づいて整理、分析したものである。さらに西シベリア地域のハンティおよびマンシの人々を対象に通過儀礼の実践に関する観察および聞き取り調査を行ない、通過儀礼の現状を明らかにした。そして現代の通過儀礼と伝統的通過儀礼との比較から、ハンティおよびマンシにおける通過儀礼の変化の実態と役割を明らかにしている。従って本論文は、我が国の文化人類学（民族学）分野では従来十分には集積のなかった当該地域における広範かつ詳細な情報資料の収集、分析、提示であると評価することができる。

また、地域的な相違を越えて、死後の世界、再生の観念などの世界観がシベリア諸民族に共通して見られること、さらに現在も社会変化によるさまざまな現代的要素を取り入れながら、共通する世界観のもとで儀礼が実践されていることが明らかにされた。そして、通過儀礼の実践が家族を中心とする集団維持機能を持つことが指摘された。これらの成果は文化人類学におけるテーマである伝統と変化の動態の解明、さらには儀礼の実践を通じた集団形成とアイデンティティとの関係の解明に寄与するものと高く評価することができる。

ただ、本論文において、ロシア語以外の文献が十分に用いられていないこと、地域的、民族的にまだシベリア全体を網羅していないことなど、さらに必要とされる点が残されている。しかしこれらは本論文が示した学問的価値を損なうものではない。本論文が提示したシベリア地域における文化人類学的研究は当該分野における今後の研究の推進に大きな意義を持つものである。

本委員会は、申請論文を慎重に審査し、口述試験を実施して十分に審議を重ね、全員一致で木村美希氏に博士（文学）の学位を授与することが妥当であるとの結論に達した。